HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	新人文学についての愚考
著者	安酸，敏眞；YASUKATA，Toshimasa
引用	年報新人文学(11)：2-5
発行日	2014-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

[巻頭言]

新人文学についての愚考

安酸　敏眞

わが北海学園大学人文学部および大学院文学研究科が、「新人文学」ないし「新人文主義」を標榜していることは、学園関係者にはつとに周知の事柄である。実際、大学院文学研究科は一〇年前から『年報新人文学』を刊行してきている。しかし「新人文学」ないし「新人文主義」が具体的にいかなる内実を有するかは、われわれ内部の教員にも必ずしも明確ではないと思われる。

わたしは曖昧な日本語の概念に出くわすと、英語とか他のヨーロッパ言語に置き換えて考える習性がある。長年、ヨーロッパ諸言語と日本語の間で格闘してきた結果、いつしかこういう癖が身についた。偏奇な習性かもしれないが、暫くおつきあい願いたい。いまの場合、「新人文学」と「新人文主義」は、さしあたり英語ではnew humanitiesとnew humanismと表現されそうであるが、実は必ずしもそう簡単ではない。

humanitiesとhumanismの語幹のhuman-は、直接的にはラテン語humanusという形容詞に由来するが、これは「人間の」(*of* or *belonging to man, human*)という意味である(ちなみに、ラテン語では「人間」

はhomoである）。言うまでもなく、humanitiesは「人類」とか「人間性」を表わすhumanityという語の複数形であるが、なぜ複数形になると「人文学」を意味するようになるのであろうか。この点について愚考すれば、おそらくルネサンス期に成立した「フマニタス研究」（studia humanitatis）なる用語に辿り着く。studiaはstudium（研究）の複数形、humanitatisはhumanitas（フマニタス）の単数属格形なので、この用語は字義通りには「フマニタス（について）の諸研究」、つまりstudies of humanityという意味になる。これが縮合された結果、humanitiesという複数形が「人文学」を表わすようになったというのが、わたしなりの推測である。もしこの推測が正しければ、いわゆる「人文学」はルネサンス期の「フマニタス研究」をもって嚆矢とする。

ついでながら、ドイツ語にはHumanwissenschaften（人文科学）という語はたしかにあるが、英語のhumanitiesに厳密に該当する語は存在しない。しいて言えば、ディルタイがその学問的基礎づけに尽力したGeisteswissenschaftenがそれに最も近いが、これは「精神科学」の謂いであるので、humanitiesとは若干の位相のズレがあると言わざるを得ない。

それでは、ここでの鍵概念となるフマニタスとはなにか。ラテン語のhumanitasは、標準的な羅英辞書によれば、*human nature, humanity*, in a good sense; *the qualities, feelings, and inclinations of mankind; the human race, mankind*という基本的意味に加えて、A. *Humane or gentle conduct* towards others, *humanity, philanthropy, gentleness, kindness, politeness*; B. *Mental cultivation befitting a man, liberal education, good breeding, elegance of manners or language, refinement*といった派生的意味をもっている。要するに、フマニタスには人間性という意味のほかに、人類愛、博愛、優美、親切、礼節、教養、上品、

洗練などの意味があるのである。英語のhumanismは――ドイツ語のフマニスムス（Humanismus）、フランス語のユマニスム（humanisme）、イタリア語のウマネジモ（umanesimo）などと同じく――、ラテン語のhumanitasに根ざしているので、この言葉にもおのずから多義性が伴わざるを得ない。その語は、われわれがここで問題としている「人文主義」という意味のほかに、いわゆるヒューマニズム、つまり博愛主義、人道主義、人間主義、人間的興味・価値・品位・尊厳を中心とする思考〔行動〕様式などを表わす。「人文主義」という日本語は、サルトルが「実存主義はヒューマニズムである」という場合や、「人命は地球より重い」という言葉に含意される日本的ヒューマニズムなどとは、およそ別の代物である。

前置きが長くなってしまったが、「新人文学」とか「新人文主義」という場合、われわれはそれによって何を言い表わそうとするのであろうか。われわれのいう「新人文学」の内実は、従来の人文学とどこが違うのだろうか。また本学が掲げる「新人文主義」は、ルネサンス期の人文主義や、一八世紀後半のドイツで標榜された「新人文主義」（Neuhumanismus）と、一体どう異なるのであろうか。この点をハッキリさせないで、ただ「新人文学」や「新人文主義」について語っても、それは中身も味もほとんど変わらないにもかかわらず、秋になると秋味、冬になれば冬味などとして売り出している、某ビールメーカーの広告と大差がない。

この点で示唆に富むのは、本誌の創刊号に寄せられた大濱徹也氏（当時の研究科長）の言である。氏はそこで、「新人文主義」とは「人間解放の名の下に、人間が自然を征服し、人間至上が『近代』の価値であると思いみなし、人間が欲望のおもむくままに世界を支配することに道を開いた人文主義が墜ちこ

んだ隘路を凝視し、人間が人間であることは何かを問い質さんとするものです」、と喝破しておられる。つまり、われわれが標榜する「新人文主義」は、近代の人間至上主義や人間中心主義への厳しい批判を含んでいなければならないのである。昨年の創立二〇周年記念シンポジウムにお招きした東北大学の佐藤弘夫教授は、「《世界》の構成員として人間のみが突出する近代の異形性（いぎょうせい）」ということを指摘し、「神や仏や死者（ご先祖様）もまたともにこの世界の構成者であった」時代がかつて実在したことを認識することで、現代人の立ち位置を相対化する必要があると語られたが、このような自覚もわれわれが標榜する「新人文主義」と通底するものである。

「新人文学」とは、上記のような謙遜な意識――宇宙的な畏敬の念と「超越への開け」――をもって営まれる人文学でなければならない。その具体的な作法は従来のそれとさほど変わらないとしても、文献学と解釈学への自覚的回帰を遂行し、自然科学と社会科学の諸成果を取り入れつつ、人間とその文化を総合的に探究する学問であらねばならない。人文学は人文科学とは違って、人間形成に資するという目標をもっているので、「新人文学」は科学技術と経済合理性が支配する現代世界にあって、人間性の陶冶を推進する新たな方策を模索しなければならない。研究と教育の場でそれを実践することは、今日の人文学が果たすべき焦眉のそして喫緊の課題である、といっても過言ではなかろう。

（やすかた　としまさ・北海学園大学教授）